

「ことば」と過去性

ローゼンツヴァイクのシェリング解釈とハイデガー

鈴木康則¹

はじめに

ローゼンツヴァイクは論考「新しい思考」において、シェリングの「諸世界時代 Weltalter」²を引き合いに出しつつ、「物語る哲学 eine erzählende Philosophie」、言い換えれば「昔々～」と語る言語活動の重要性に着目した(MW3 147-148)³。ここではローゼンツヴァイクの「物語る哲学」の内実を検討し、その可能性を素描してみたい。

「物語ること」はローゼンツヴァイクにおいて、単に言語活動の一つというわけではない。むしろ人間にとっての「ことば」一般が「物語ること」から規定されるのである。さらに「物語ること」は、単に「過去」の出来事を語るという意味に尽きるのではなく、独特な意味での「過去性」を含意するものなのである。

ローゼンツヴァイクのこのような哲学的発想は、その内実を詳細に検討するならば、より一層興味深いものとなるはずである。「物語る哲学」はさしあたりローゼンツヴァイクの思考として提示されるべきであろうが、その射程はローゼンツヴァイク研究に限られるものではなく、シェリングやレーヴィット、ハイデガーの論考も巻き込まれるような、さらに「ことば」の奥深い次元を問題として提示しうるはずである。

1. 「新しい思考」と「物語る哲学」

ローゼンツヴァイクの「新しい思考」(1925)は、『救済の星』(1921)の補足として記されたものであり、『救済の星』の意図を説明しつつもその内容には収まらないような論点も提示している。今回着目する「物語ること」という要素は、主に「新しい思考」においてローゼンツヴァイク自身の哲学的手法として主題とされているものである⁴。その内容はどのようなものだろうか⁵。

¹ 慶應義塾大学非常勤講師、yapunori24s[at]gmail.com ([@]を@へ変更)

² シェリングの“Weltalter”については、定訳が無いというのが現状である(菅原潤、「悪論と神話論のあいだーシェリング『世界の年代』(Weltalter)の射程」、国際哲学研究(別冊5)、東洋大学国際哲学研究センター編、2014年、71頁参照)。英語では The Ages of the World、仏訳では Les Âges du monde と訳されるが、日本語では適切な語句が見当たらないようである。ここでは暫定的に「諸世界時代」と訳しておくが、たとえば日本語の「紀」には「時代」の意味があるので、「世界諸紀」と訳すことも可能であろう。

³ Franz Rosenzweig, *Der Mensch und sein Werk, Gesammelte Schriften 3*, Martinus Nijhoff, 1979 (= MW3).

⁴ 「新しい思考」が取り上げる論点のうち、「神」についての言及については今回立ち入る

「物語ること」において重要なのは、「本質」ではなく「経験された現実性」(MW3 148)である。「本質 Wesen」を問題にする思考は「何であるか」を問い、「～である」という答えを得ようとする。この思考が「古い思考」と呼ばれるのだが、ローゼンツヴァイクによれば、「古い思考」においては「時間」が扱われない点に問題がある（「本質は時間について何も知ろうとしない」 MW3 148）。「古い思考」に対比されるのが「新しい思考」、すなわち「物語る哲学」(MW3 148)、あるいは「経験する哲学 die erfahrende Philosophie」(MW3 144)である。「新しい思考」は、「物語る」ことあるいは「語る」ことを「方法」として採用するが、その狙いは「時間」の契機を考慮すること、あるいは「時間を真剣に受け取ること」(MW3 151-152)である。

以前のあらゆる哲学が形成したような思考方法にかわって、語るという方法が現れる。思考は無時間的であることを欲している。また、思考は一挙に無数の結合を築こうとする。……語ること(Sprechen)は時間に結び付けられ、時間によって育まれる。……語ることは、それがどこで現れるのかを前もって知らない。語ることは、他者からそのきっかけの言葉を与えられる。語ることはそもそも他者の手を借りて生活することである。これに対して思考は、たとえ共同で複数の「一緒に哲学をする者たち」のあいだで生じるとしても、つねに孤独である(MW3 151)。

この箇所では「新しい思考」の要素として、「時間」と「他者」の契機が挙げられている。まず「時間」と「語ること」の関連を確認しよう。

Freundによれば、「語ることは連続的にのみ可能であり、すべてを一度に言うことができない」⁶。つまり「語ること」はどれほど早口に発せられたとしても、最小限の時間的広がりを含まざるを得ない。「語ること」は「時間」を必要とするのである。では「思考」は「語ること」とは違って、「時間」を含まず、「無時間的」に生起するのだろうか。

注意したいのは、「思考」が「無時間的であることを欲する」という点である。「思考」は「無時間性」を「欲する」のであって、「思考」がただちに「無時間的」というわけではない。ローゼンツヴァイクはこれまでの哲学が「世界」や「神」、「人間」の「本質」を問うような「思考」であったことを取り上げ、近代では「自我」をそ

ことができない。「神」はシェリング、ハイデガーにおいても問題となる重要な論点であるが、本発表の立場では「神」の問題に先立って、「物語ること」こそが考究されるべきものであると考えるからである。

⁵ 「物語る哲学」については、以下を参照。佐藤貴史、『フランツ・ローゼンツヴァイク 新しい思考の誕生』、知泉書館、2010年、86頁以下。ただし「物語る哲学」の内実については、本発表の解釈とは異なっている。

⁶ Else Freund, *Die Existenzphilosophie Franz Rosenzweigs*, Hamburg, Meiner, 1959, p. 9 (=Freund).

これらの「本質」としてきたと論じている(MW3 143)。「思考」は時間に左右されないような、「本質」を求めるが、実際にはどんな「思考」も「時間」を必要とするのである。「思考」も「語ること」も、どちらも「時間」を必要とするが、「無時間的」な「本質」を求めるかどうかは区別の契機である。

この点に注意すれば、さしあたりは「思考」と「語ること」の区別が可能となる。だが厳密に両者を区別しようとするなら、どの点に着目すべきであろうか。「語ること」が必要とする「時間」の契機がどのようなものを掘り下げる必要がある。ローゼンツヴァイクによれば、「語ること」は「他者の手を借りる」と表現されている。この場合、どのような意味において「他者の手を借りる」のだろうか。自分一人では「語る」ことができないということの意味するのだろうか。任意の「他者」と何らかの会話が生じるなら、それはローゼンツヴァイク的な意味での「語る」こと（すなわち「新しい思考」）に相応しいと言えるのだろうか。

2. 述語における「強制力」

上記の問いを検討するために、ローゼンツヴァイクが『救済の星』の解説のために執筆した『健康な悟性と病的な悟性（以下『悟性』）』から、必要な箇所を抜き出して検討してみたい⁷。

手がかりとしたいのは、ローゼンツヴァイクが「本質の問い」を論じている箇所である。「新しい思考」の立場からすれば、「本質」を問う「古い思考」は否定されるべきものである。ところが『悟性』においてローゼンツヴァイクは、「本質の問い」に対する答えとしての命題について、興味深い論述をしている。

「～である」という命題のうちには、述語は主語よりも賢明でなければならないという強制力(Zwang)が含まれている。陳述(Aussage)はなにかを付けくわえなければならない。陳述は陳述の対象よりもつねにいつそう本来的であり、真理にいつそう近くなければならない——たとえそれが、4のほうが2×2よりもいつそう真であるといった程度のことにはすぎないとしても⁸。

命題に含まれる述語は、主語に対して「なにかを付けくわえなければならない」ような、「強制力」を持つとされている。「AはAである」という「同一律」のように、述語が主語に対して何も付加しないように見える場合、人は「Aは～」に続いて

⁷ 『悟性』では「新しい思考」という語句は登場しないが、「言葉」が「本質」と対比されている点に変更はない。

⁸ Franz Rosenzweig, *Das Büchlein vom gesunden und kranken Menschenverstand*, hrsg. von Nahum Norbert Glatzer, Melzer, 1964, pp. 79-80 (= BM).

「A」以上の何かを期待するのではないだろうか⁹。「AはAである」という命題に落胆を感じるとすれば、それは主語に続いて述語が何かを付加するべく無意識的な期待が存在してしまっているからではないか。この期待をローゼンツヴァイクは「強制力」と呼んでいると解釈してみたい。

「 2×2 が4である」という命題の場合だと、述語の「4」が「 2×2 」に何を付けくわえたのかはわかりにくい。だがたとえば数を増やして「 562×73 」というような主語部を想定すればどうだろう。この場合「41026」という述語において、主語部にはただちに見て取ることができない要素が付加されたと言える。これは計算だけでなく、「人生は美しい」(BM 79)というような命題でも同様である。「人生」という主語に対する「美しい」という述語は、「人生」という単語のみでは語られなかった事態が出現させるのである。

このような記述において、ローゼンツヴァイクは「主語」と「述語」を、分離されたものとして扱っていることに着目してみよう。「本質」という点から見れば、「 2×2 」と「4」はひとつのものにすぎないが、「主語」と「述語」の分離という観点からすれば、「 2×2 」と「4」は別のものである。いささか強引に解釈すれば、「述語」において、時間経過を含みつつ新たな要素が付加されることにおいて、「語ること」の意義が発見されていると言えるだろう。この意義こそが「新しい思考」あるいは「物語る哲学」が見出したものではないだろうか。

「新しい思考」とは「時間を真剣に受け取ること」とされていたことを思い出しておこう。「時間を真剣に受け取る」ことは、「思考」を無時間的に扱うことではなく、「問い」と「答え」、「主語」と「述語」の内にも時間の隔たりを見て取ることである。「本質」を扱う観点からすれば「 2×2 は4である」は無時間的な命題に見えるが、実際には「 2×2 は……」の時点で時間が経過し、何らかの記述と出会うことを期待している。「4」という述語はその期待あるいは「強制力」に適合するべく、「時間」の経過によってもたらされた「他者」である。「4」は「 2×2 」からすれば「他者」であることになる。

このように考えれば、「時間を真剣に受け取ること」が「他者」の出現という事態に重なることは偶然ではなく、両者は同一の事態の別様の表現であることが分かる。たとえば『悟性』においてローゼンツヴァイクが挙げるのは、「問い」と「答え」として「結婚の申し込み」の例である¹⁰。相手からの「答え」は、「問い」の側から予

⁹ ハイデガーの「同一律」解釈においても、「 $A=A$ 」は文字で表現されていること以上の事柄が読み込まれている。たとえば「 $A=A$ 」は「AはAである」の方がより適切であり、また「Aはそれ自身おのれ自身と同一である」というように、新たな「述語」によってより「賢明」な方へと解釈が進む(ハイデッガー全集 79、森一郎他訳、『ブレーメン講演とフライブルク講演』、創文社、2003年、139頁以下参照)。「同一律」においてさえ、ローゼンツヴァイクの言う「強制力」は作用しているのである。

¹⁰ 「結婚の申しこみの場合も似たようなものである。申しこもうと決意することと、最終的

測したとしても裏切られることもある。また船便で手紙を交換する場合のように、問う者にとっても答える者にとっても時間の経過がのしかかり、それぞれの心境の予測ができないとされている。

ただし注意せねばならない点が残っている。それはローゼンツヴァイクの「他者」についての規定である。「結婚の申し込み」の例が示すような、「相手の反応が予測できない」という点のみを強調する場合、「語る」ことの学問的性格が見失われてしまう。これは「新しい思考」での記述にも当てはまる。「語ることはそもそも他者の手を借りて生活することである」との規定を額面どおり受け取ると、「私」が何かをする余地が無くなるだけではないか、との疑念が解消できないように思われる。

3. シェリングとローゼンツヴァイク——「沈黙の対話」と「物語」

このような疑念を検討するために、ローゼンツヴァイクが「物語る哲学」の前例として挙げていたシェリングを参照しておこう¹¹。

人間のうちには、一方で記憶へと立ち戻らされねばならないものと、他方でそれを記憶へともたらすものが存在する……この分離(Scheidung)、われわれ自身の二重化(Verdoppelung)、二つの本質が存在するこの秘密の交渉(Verkehr)〔は〕問う本質と応答する本質〔であるが〕……この沈黙の対話(stille Gespräch)、この内的な会話の技法(innere Unterredungskunst)は、哲学することの本来的秘密(eigentliche Geheimnis)である。外的にはこの会話は弁証法(Dialektik)と呼ばれ、弁証法はこの会話の残像(Nachbild)なのである。弁証法が形式のみを持つ場合、

にそれに応じたり拒絶したりすることのあいだには、つねに時間がある。この時間はぎりぎりまで縮められることもある。……この時間は長く引き伸ばされることもありうる。たとえば、結婚の申しこみが手紙で海を往復する場合のように。ばあいによっては数年以上も時間がかかることがある。問いと応答のあいだに数年にわたる間が置かれるというそうした実例を、たしかに戦争がつくりだしたことがある。いずれにせよ、それには時間が必要である。それには時間が必要なことから、応答する人が問いを発せられたときとは変わってしまい、その応答を受け取る側もみずから問いを発するときとは変わっているということも、避けられない。こうした変化がどの程度にまで及ぶかは決して予測できない。……結婚を申しこむときにもそれに答えるときにも、人は一般にそうした変化の可能性などは考えないものである」(BM 41-42)。この場合、変化を考慮するのが「語る」思考であり、変化を考慮しないのが「本質」を扱おうとする「古い思考」ということになる。

¹¹ ローゼンツヴァイクは「新しい思考」において、次のように記している。「シェリングは「諸世界時代」という彼の独創的な断片の序言で、物語る哲学を予告した」(MW3 148)。ステファヌ・モーゼスによれば、シェリングが参照していたのは1913年出版のレクラム版(*Die Weltalter*, hrsg. von Ludwig Kuhlenbeck, Reclam, 1913)とのことである(Stéphane Mosès, *Système et révélation. La philosophie de Franz Rosenzweig*. Bayard, 2002, pp. 36-37, (=Mosès))。確認した限りにおいて、レクラム版はSW第8巻と同じテキストであるが、編者による注が入っている点のみSW版と異なる。

それはこの会話の空虚な仮象であり影なのである(SW8 201)¹²。

この記述が存在する「諸世界時代」の第三稿において、シェリングは人間のうちに「分離」（「問う」側と「応答」する側）を見て取っている。「分離」という観点からすれば、「2×2」と「4」を区別していたローゼンツヴァイクとシェリングの立場は重なるものであると言えるだろう。

注意が必要なのは、シェリングはこの箇所において「沈黙の対話」に言及していることである。これは「問う」側と「問われる」側との関係を指していると思われるが、なぜ「対話」が「沈黙」と呼ばれねばならないのだろうか¹³。シェリングの立場では、他の人間に向かって発話する関係は「外的」であり、そのような「弁証法」に先立って「内的な会話」が存在している。したがって「沈黙」というのはあくまで「外的」な観点から見たものであり、「内面」としては「会話」であることに変わりなく、「語ること」は成立しているはずである。

ではシェリングの言う「沈黙」とローゼンツヴァイクの「語ること」はどのような関係になるのだろうか。ここでの見通しとしては、シェリングとローゼンツヴァイクの間に矛盾は無い。次の文章を見てみよう。

古い思考、思考する思考は内面での語り(*inneres Sprechen*)がなければ生じなかった……古い思考と新しい思考……の違いは、騒々しい思考と静かな思考のうちにはなく、他者を必要とすること、そして同じことだが、時間を真剣に受け取ることのうちに存する(MW 151-152)。

ここでローゼンツヴァイクは「内面での語り」の根源性に言及しており、「古い思考」は「新しい思考」の派生態として扱われていることがわかる。ローゼンツヴァイクの関心は「内面」での「発話」に向けられており、「外的」には「沈黙」として扱われることに何の問題もないのであって、このように考えればシェリングとの矛盾は存在しないのである。

ではシェリングにおいて「物語る」という契機は存在しているのかどうか問題となる¹⁴。ローゼンツヴァイクに対して「諸世界時代」はどのような手がかりを与え

¹² *Friedrich Wilhelm Joseph von Schellings sämtliche Werke*, hrsg. von Karl Friedrich August Schelling, Stuttgart, Cotta (= SW).

¹³ 「対話」と「沈黙」の関係については、拙稿において別の観点から検討を加えた（鈴木康則、「エリック・ヴェユにおける対話の意義——「論理学」と「暴力」の関係について」、倫理学年報第67集、2018年、247-260頁）。

¹⁴ シェリングの「諸世界時代」の研究において、必ずしも「物語る *erzählen*」ことが重要視されているわけではない。山口和子はシェリングのうちに「物語としての哲学」を主題化しているが（山口和子、『未完の物語』、晃洋書房、1996年、第三章）、岡村は *erzählen* を「語る」と訳し、「物語」的性質を検討しているわけではない。「諸世界時代」に限って言えば *erzählen*

ているのかという点については、研究者の解釈は一致していない。「諸世界時代」に限定する場合、シェリングはローゼンツヴァイクの「物語る哲学」を提供していないと見なすか¹⁵、あるいは「過去」「現在」「未来」という形式上の影響に限定して捉えるような立場が存在する(Mosès 41)。だがここでは両者の関係は本質的な連関を持つと考えてみたい。なぜなら「物語る」という概念は両者において、おそらく共通の次元の発見に関与していると思われるからである。

シェリングは先ほどの引用に続いて、「物語る *erzählen*」契機に言及する。

したがって、知られた全てはその自然にしがって物語られる。しかし知られたものは……手元にあるものではなく、むしろそれは自身に本来的に固有の過程を通じて、内面から最初に常に生じるものである。……われわれが学と呼ぶものは、まずは想起への努力のみである(SW8 201)。

ここでの「知られた全て」が「物語られる」というのは、「諸世界時代」冒頭の反復である¹⁶。ただしここでは「物語る」のではなく「物語られる」ものであることに注意したい。シェリングの「物語論」は何らかの話を作り出すというのではなく、「想起への努力」によって「物語られる」という受動的なものなのである。もちろん「努力」と呼ばれる以上、「物語」には能動的あるいは主体的な参与の契機は欠かせないが、寓話や詩を創作するような作業としては捉えられてはいないのである¹⁷。

シェリングは、「物語られる」ものが「知られたもの」、つまり「過去」の次元にあることを明確に示している。さらに「想起への努力」という語が示すように、シェリングにおいて学的な課題はそもそも「過去」にかかわることとして捉えられている¹⁸。「過去」の探求がシェリングの課題なのである。ではローゼンツヴァイクに

という語はごく僅かしか使われていないので、シェリングのうちに「物語」を読み込まない解釈も成り立つ。他にシェリングの「物語」を主題化したものとしては以下を参照。Marc Maeschalck, “Les Weltalter de Schelling : un essai de philosophie narrative”, *Laval théologique et philosophique*, vol. 46, n° 2, 1990, p. 131-148. Katia Hay, “The Role of Narration and the Overcoming of the Past in Schelling’s Ages of the World”, *Comparative and Continental Philosophy*, special issue: Schelling, 8.3, Fall 2016.

¹⁵ 「シェリングは物語る哲学を決して提示しなかった」(Freund 133)。

¹⁶ 「過ぎ去ったものは知られ、現在的なものは認識され、未来的なものは予感される。知られたものは物語られ、認識されたものは叙述され、予感されたものは予言される」(SW8 199)。「諸世界時代」(その主な三つの草稿の冒頭でのこの文言は全て同一である)はこの言葉でもって始まる。引用に際して山口和子の『未完の物語』149頁での訳文を用いたが、一部変更を加えさせていただいた。

¹⁷ 「物語」というシェリングの試みは「詩や哲学的スタイルの形而上学的小説と置き換わることができない」(Xavier Tilliette, *Schelling Une Philosophie En Devenir I*, p.591)。山口和子、『後期シェリングと神話』、晃洋書房、2004年、163頁も参照。

¹⁸ この文脈における「過去」が、シェリングのいわゆる「超越論的な過去」とどのような関係にあるかについて、ここでは立ち入ることはできない。「超越論的な過去」については以下

おいて事情はどうなっているのだろうか。

「新しい思考」や『悟性』においては、「過去」についての主題化は少ない。ただし『救済の星』においては、シェリングの「諸世界時代」が踏まえられつつ、「物語」にかんする興味深い記述が存在する。

過ぎさったもの、すでに出来上がったものは、始まりから終わりまで存在しており、それゆえに物 - 語る(er-zählen)ことができる——そして数える(zählen)ことは、すべて順番のはじめから始まる(MW2 244)。

この箇所において、ローゼンツヴァイクが「物 - 語る(er-zählen)」と分ち書きしていることに着目してみたい。「物語る」を分ち書きすることで、「数える」との関連が示される。「物語る」とは「数」の秩序に入ることとして、さらに「過ぎ去ったものとの関係として理解されているのである¹⁹。ローゼンツヴァイクが「主語」と「述語」を「分離」として捉えていたこと、さらに『悟性』においては「根源語」²⁰を「～と」に見出していたことが、ここでの「数」に関連する。「～と」という「根源語」において、「ことば」は「物語」的次元に参入したことになるのである。

4. ローゼンツヴァイクにおける「他者」の問題

「物語」をめぐる思考において、ローゼンツヴァイクとシェリングは立場的に同じものであると考えてよいのかどうか、検討の余地が残っている。それは「他者」あるいは「分離」についての観点である。ローゼンツヴァイクにおいて、「他者」は「わたし」にとっての還元不可能な契機として扱われていた。「もし他者が「最も深い根底において」私と同一であるならば、私は他者を愛することなどできない」(MW3 150)。

だがシェリングの立場からすれば、ローゼンツヴァイクの「他者」は「弁証法が形式のみを持つ」にすぎず、規定としては「空虚」なものになってしまうのではないか。

この点を考えるために、レーヴィットによるハイデガーとローゼンツヴァイクについての論考を引いておきたい。

を参照（三重野清頭、「超越論的な過去」——初期シェリングの時間論」、倫理学年報第59集、2010年、pp. 159-172）。

¹⁹ベンヤミンも「物語作者 Der Erzähler」において「物語ること」と「過去」との関連に言及していた。ただし「歴史」や「時間」の問題にかかわる、ローゼンツヴァイクとベンヤミンのあいだの関連については、ここで立ち入ることはできない。

²⁰『救済の星』において、「根源語」は「然り」「否」「～と」である。

ハイデガーもローゼンツヴァイクも、おのれがすでに現存在しているという「事実性」ないし「現実性」から出発する。したがって両者は、デカルトによって基礎づけられた出発点、つまり経験的な事象内容から純化された自我とか自己意識という出発点を否定する。……両者の道が分かれるのは二人称にかんしてであり、それによって一人称の存在もまた違った意味を持つようになる。……ハイデガーの分析には、相互「承認」という現象が欠けているのである。……現存在は、その共同性にもかかわらず、繰り返えしたただ自分自身にしか「出会う」ない²¹。

レーヴィットの見立てにおいて、ローゼンツヴァイクは「呼びかけ」の「二人称」的次元を見出すことによって「他者」の問題を提出したのに対し、ハイデガーの分析では「二人称」は適切に扱われていない。問題は、「二人称」という「弁証法」の領域を、レーヴィットは「形式的」にのみ扱っているのではないかという点である。

ローゼンツヴァイクが「物語る哲学」のうちに「他者」の契機を強調していたことは先ほど確認した通りである。ではハイデガーは「二人称」あるいは「弁証法」の次元を扱い損なっていることになるのだろうか。

ここではハイデガーの他者論を参照する余裕はないので、『存在と時間』の「良心論」を確認してみよう。ハイデガーによれば、「自己対話」(SZ 273)²²は「何も伝達せず」、「良心」は「沈黙という様態において語る」(SZ 274)。この分析において「他者」は登場せず、「出会う」のは「自分」のみであることは確かである。だがシェリング的立場からすれば、ハイデガーの「自己対話」こそ「哲学することの秘密」であって、ハイデガー的分析の価値こそ最も評価されるべきものかもしれないのである。

「他者」を考えるにあたって、「わたし」に還元不能な「他人」が最も根源的であるのか、あるいは「自己対話」のような意味での「他者」が最も根源的なのか、決着をつけることなど可能なのだろうか。

この場面で考えたいのは、「物語る哲学」というローゼンツヴァイクの立場である。ローゼンツヴァイクにおける「物語る哲学」は、「2×2が4である」というような命題においてすら、すでに「時間」の経過が含意されていることを見出していた。これはあらゆる「本質」に先立って、「語ること」の次元の根源性が発見されているという事態である。ということは、「他者」はその「本質」が見出されるに先立って、まず「ことば」として与えられているはずである。「他者」という「ことば」はすでに所与となってしまう。この次元に先立って「本質」を決定することは不可能なのだから、「他者」の「本質」を「二人称」に見て取ることに對しては、慎重で

²¹ K. Löwith, "M. Heidegger und F. Rosenzweig. Ein Nachtrag zu Sein und Zeit", in: *Gesammelte Abhandlungen*, Kohlhammer, 1960, pp. 75-76.

²² Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 1993(=SZ).

あるべきではないだろうか。

終わりに

これまでの歩みをまとめておこう。ローゼンツヴァイクが見出していたのはあらゆる「本質」に先立つような、「語ること」の次元の根源性である。さらにこの次元の根源性は「自我」に還元されるものではなく、「他者」の契機を必要とするものであった²³。このような間主観的次元での「語ること」は、「本質」や「事実」にさえ先行するものである。何らかの「事実」の後に「ことば」が到来するのではなく、むしろ「語ること」が到来した後で「事実」が規定されるのである。「物語る哲学」は「語ること」が「すでに」、すなわち「過去性」において成立している根源的次元の探求であることになるだろう。

これはシェリングが「学の意味」を「*ιστορία*」に見ていたことと重なるのではないだろうか²⁴。「*ιστορία*」は「歴史」ではなく「探求」とされる²⁵。ただしその「探求」は、過ぎ去った事柄が対象であるだろう。この意味において「哲学」と「歴史」は探求が重なるのである。

では歴史学との関係はどうなるのであろうか。たとえばダントーの言う「理想的年代記」²⁶のような発想においては、「物語る哲学」はその位置を持つことはできない。いかなる「年代」であっても、それらが画定されるのは「語ること」の後であることは確かであると思われるからである。ローゼンツヴァイク的「物語る哲学」が、いわゆる歴史哲学上の「物語論」にどのような影響を与えうるかについてはここで立ち入ることはできないが、「物語」という次元が「ことば」の根源にまで遡源しうることは確認できたことにして、発表を終わりたい。

²³ ローゼンツヴァイクにおける「間主観的」次元については、最近重要な論稿が発表された（佐藤香織「ローゼンツヴァイクにおける聖書物語の意義」、京都ユダヤ思想第9号、2018年、28-48頁）。

²⁴ 「諸世界時代」第二稿でのシェリングによれば、学とはすでに「*Historie(ιστορία)*」である（*Die Weltalter. Fragmente in den Urfassungen von 1811 und 1813*, hrsg. von Manfred Schröter, München, 1979, p. 111）。

²⁵ 「ギリシア語 *historia*」には、「当初から「過去の記録」の意味があったわけではない。動詞 *historein* ヒストレインは「質問する、調べる、探求する」というほどの意味」であった（中務哲郎、『ヘロドトス『歴史』——世界の均衡を描く』、岩波書店、2010年、7頁）。

²⁶ アーサー・C・ダント、河本英夫訳、『物語としての歴史：歴史の分析哲学』、国文社、1989年、第八章参照。「理想的年代記」については以下を参照（野家啓一、『物語の哲学』、岩波書店、1996年）。